

平成25年(ワ)第38号、同第94号、同第175号

「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件等

原告 中島 孝 外

被告 国 外1名

## 意見陳述書

2017年3月21日

### 1 私の人生と双葉町

私が生まれ育ち、人生のほとんどを過ごしてきた双葉町から突然追われ、6年が経ちました。今も帰還困難区域に指定されています。

私は、昭和29年10月20日に双葉町で生まれました。4歳下の妹と2人姉妹です。短大時代に2年間、神奈川に住んだことはありますが、それ以外はずっと双葉町で暮らしてきました。私たちの家は、私の両親が一所懸命働いて建てた自慢の家です。私の子どもの頃からの思い出と、私たちの子どもたちの思い出がたくさん詰まっている家です。

裁判所のみなさんには、原発事故後の荒れ果てた姿を検証でご覧いただきました。あの状態から、さらに1年が経過しました。夫は時々家の様子を見に双葉町に行っていますが、私は平成26年11月に行って以来、2年以上立ち入りしていません。行く時は、家の状態はどうなっているんだろうと気になって行くのですが、帰ってくる時はがっかりしてしまい、もう行きたくない、そう思ってしまう。汚れて臭くなり荒れたままの家や町を見るのが嫌になるのです。一時立入する夫から写真などを見せてもらいますが、それだけでも辛いです。

ピアノは、私が小学校3年生頃の時に、両親が買ってくれました。当時はとても高価なものだったと思いますが、両親が商売して稼いだお金で買ってくれ

ました。お姫様のような気分でした。長女もピアノを弾きました。親子教室で、私も一緒に通っていたのを思い出します。台所の柱には、子どもたちの身長がしる記してあります。誕生日になると、夫が、身長に名前と年齢をマジックで書いていたものです。子どもたちの成長が刻まれています。私は料理をするのが好きで、料理を綺麗に盛りつけるのも好きです。料理に合った器やお皿を集めるのも好きでした。できあがる料理の色や形をイメージしながら食器を選んでいました。妹家族や友だちが家に来ると、料理をたくさん作ってもてなしました。双葉の家で過ごした日々は、楽しい時間でした。幸せな時間でした。でももうそれもかなわなくなりました。

## 2 ふるさとが奪われている

昨年末、国は、5年後の平成33年に帰還困難区域の一部を復興拠点とし、区域指定を解除すると決めました。これに合わせて双葉町も双葉駅周辺の居住環境を整えると発表しています。

しかし、これによって帰れるようになるのは双葉駅西側の40ヘクタールのみで、町の面積の約0.8%にすぎません。私たちの家はその範囲外で、除染も、区域指定の解除もいつになるか示されていません。駅西側に住んでいるのは町民のほんの一部です。ほとんどの人は範囲外になります。

東京電力は、帰還困難区域も復興し、あたかも多くの住民が帰れるかのようには言っていますが、このような現実をわいさよく歪曲しています。私たちを馬鹿にするのもいいかげんにしてほしいです。

6年前の福島第一原発事故により、放射性物質が大量にまき散らされ、広範囲にわたり大地が、そしてすべてが、汚染されました。除染はしているものの、放射性廃棄物の置き場がなく、半ば強引に国は双葉町と大熊町に中間貯蔵施設を仕立て上げました。双葉町には、毎日大量のフレコンバッグがひっきりなしに搬入されています。夫は、一時立入する時、「放射性物質を積んでいる」「大型ダンプのすさまじい数」の往来に、つい鼻と口を塞いでしまうといます。

こんな状態がいつまで続くのか。中間貯蔵というけれど最終処分場にされてしまうのではないか。南東の風や南の風が吹いたら、放射性物質が風に交じって町全体に飛んでくるのではないか。中間貯蔵の汚染がダンプや工事車両によって広がらないか。30年もの長きにわたり、放射性物質が置かれたままで、いったいどれだけの人たちが帰るのでしょうか。

本来継ぐべき土地や家屋さえも子供たちに継ぐこともできない状態です。双葉町で生まれ育った親戚の子は、原発事故当時2～3歳くらいでしたが、小学生になった今「自分の故郷はどこか」と尋ねたら避難先の地名を答えたと言います。だんだんそういう人が増えてくると思うと危機感を覚えます。

### 3 親族や地域の人たちとのつながりも元には戻らない

また、東京電力は、私たちが福島市内に家を建てたから、そこを拠点に家族や親族と親密な関係が築けると言います。地域の人たちとの関係が破壊されたことについても、賠償を払っているのだからいいだろうと言います。

何を言っているんだろうと思います。いまの住まいでは、親密な関係など築けるわけがありません。原発事故により、家族や親族、地域の人たちも避難を強いられ、ちりぢりになりました。故郷<sup>ふるさと</sup>を失われ、住民や地域の交流も失われました。故郷に居れば、近くにいつでも友達や親戚がいました。今は、あっちの人が亡くなった、こっちの人が亡くなったと聞けば、日帰りでは行けず、1泊または2泊の宿とりをして、遠くまで出かけ、通夜<sup>つや</sup>と告別式を行います。親族や地域の人たちとのつながりはお金には代えられません。

### 4 いまは「仮の住まい」でしかない

最近、夫と2人で、私たちの最期<sup>さいご</sup>がここで本当に良いのだろうかと話しています。私たちもいま福島市に住んでいますが、あくまでもここは「仮の住まい」です。パートに出るなど色々やってみようと思うのですが、どうしても馴染めません。どこに行っても落ち着きません。双葉以外は考えられません。何もないところだけど、やっぱり双葉が一番です。空気が違います。やっぱり私の

住む場所は双葉なんです。

私たちだけでなく、みんなまた、今までそこにいた人たちと、元のように助け合い、暮らしていけるよう望んでいます。

## 5 最後に

東京電力の当時の会長・勝俣恒久さんも当時の社長の清水正孝さんも事故後、一度も双葉町民の前に姿を現すことはありませんでした。

「お金なんかいらない。私たちの町を元のおおりに、元の姿にもどしてもらえれば、それでいい。」

それが、私たちの心からの願いです。